

日義村の文化財 1

おだまのもり

御靈森遺跡

発掘調査報告書

長野県木曾郡日義村教育委員会

目 次

序	3
例 言	4
1. 調査の経過	5
2. 遺跡の位置及び立地	7
3. 周辺の遺跡	7
4. 遺 構	10
5. 出土 遺 物	13
(1) 石 器	13
(2) 土 器	14
6. 結 語	18

図版目次

図版 1 遺跡航空写真、遠景	24
図版 2 住居址	25
図版 3 遺物、遺構出土状態	26
図版 4 出土土器	27
図版 5 出土土器	28
図版 6 出土土器、石器	29
図版 7 発掘調査風景	30



挿図目次

第1図 御靈森遺跡所在地図	6
第2図 周辺遺跡分布図	9
第3図 日義村の時期別遺跡数表	9
第4図 地形測量図	10
第5図 住居址実測図	12
第6図 住居址覆土地層図	12
第7図 出土石器実測図	18
第8図 出土土器実測図	19
第9図 出土土器拓影	20
第10図 #	21
第11図 #	22
第12図 #	23

序

埋蔵文化財の発掘調査は、発掘主体が誰であれ、また、その目的が学術調査にしろ、開発のための記録保存調査にしろ、或はその面積がいか程であっても、いったん発掘すればそれは破壊になってしまうものです。だから、そっと地下に眠らせておくことが最も賢明な保護の仕方であるといわれます。

しかし、私たちが『いま』を生き抜くためには、やむを得ず現状を変更せざるを得ないこともあり、環境の変化により破壊される恐れのあるものについては、発掘により記録保存に努めなければなりません。

昭和47年、学校の配水池築造に伴い、御靈森遺跡が破壊されるということで調査をしたが遺物は検出できなかった。しかし、その後周辺にかなり遺物がみられ、住居址の一部を確認したが破壊の懼れがあるので、昭和49年、緊急発掘調査を行うことにしました。調査が始まると、予想どうり縄文時代の竪穴住居址の一部が検出されたが、人数不足等により更に期間を延長し、8月に完場することができました。

この調査は、青沼博之先生の献身的なご努力と、神村透先生のご指導、長谷川悦夫氏はじめ木曾考古学研究会の方々のご助力に負うところが大되었습니다。また、発掘後は、土器の細片に至るまで出土品の整理にも、多くの時間を費やしていただきました。

更にこの報告書の作製に当っては、青沼先生が教職という多忙な職務にもかかわらず、寸暇を惜んで執筆の任に当られたご労苦は計り知れないものと思い、深く感謝申上げる次第です。また、地主の越取長十氏、神村浅芳氏も心よくご協力をいただきました。

日義村は、木曾郡下有数の埋蔵文化財の宝庫であり、8,000年以前から人々が生を営んでいたということは、谷狭い木曾の中ではこの地が比較的空広く、丘あり水清く、地形的環境条件に恵まれていたということでしょう。その同じ地に、発達した文化生活を営む私たちは、少くとも調和のある開発を模索しつつ、この自然環境を保護していかなければならないと思います。

昭和51年3月

日義村教育長 今井秀夫

例　　言

1. 本書は、日義村における学校配水池築造工事にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆は、日義村教育委員会の依頼により、すべて青沼博之が担当した。
3. 土器については神村透の分類と指導によった。
4. 土器拓影、写真撮影はすべて青沼博之が担当した。
5. 土器実測図は、市沢英利が担当した。
6. 地形測量図、住居址覆土地層図は、木曾西高校地歴部の生徒が実習として行ったものである。
7. 出土遺物、遺物実測図・拓影図は、日義村教育委員会が保管する。

1. 調査の経過

日義小・中学校の配水池が、日義村1,779番地に建設されることになった。この建設地域は図2に示すように、住居址、炉址等が過去において発掘調査されており、また、学校東側の畠、桑畠中より灰釉陶器片、縄文土器片、打石斧等が多數採集され、かなり広い範囲にわたる遺跡であることが確認されていた。遺跡名は字名をとり、御靈森遺跡（遺跡番号4418）と総称されている。

貯水タンク建設地内でも、石鏸、打石斧、縄文中期土器片等が長谷川悦夫氏により採集されており、緊急発掘調査を行い記録保存することになった。

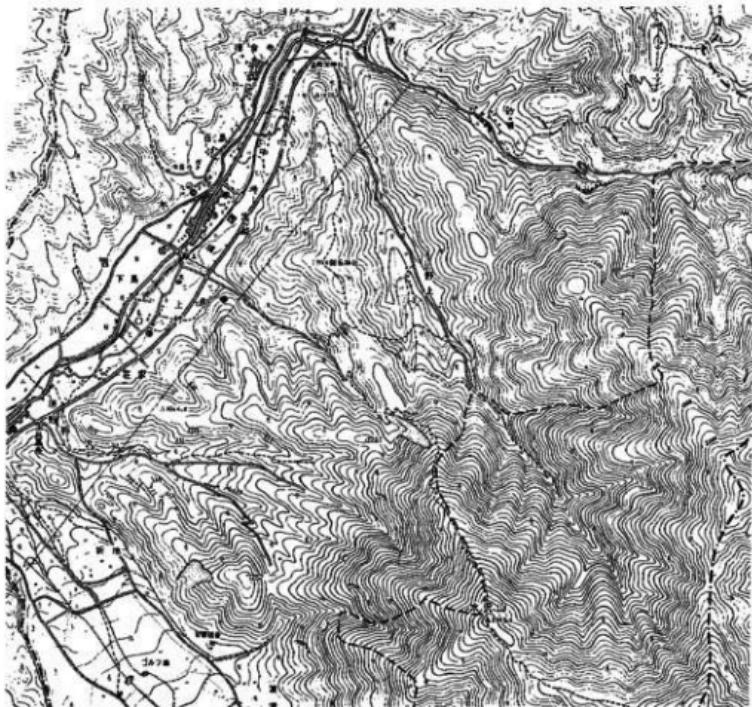
調査主任に、筑摩高校教諭、樋口昇一氏をお願いし、現場主任として日義中学校教諭の青沼博之氏、日義村役場の長谷川悦夫氏をあて、第1次発掘調査を昭和47年4月3日から10日間行った。発掘は、貯水タンク建設地内の80平方メートルを限り、地元日義小中学校の社会科授業の野外実習の一環として、生徒諸君が中心となって行われた。現地は以前水田だった所を桑畠として使用されており、そのため、水田造成時に土地が削られており、東側はローム面までも削られていたため遺構を検出することができず、また、遺物も土器片、石器ともにわずか数十点のみ検出されただけであった。この第1次発掘調査の際、発堀区東側の自然地形が残っているところを試掘したところ、ピット、焼土とともに勝坂式土器片、加曾利E式土器片等を検出し、さらに、南側から住居址の一部と思われる落込みを確認した。このためさらに調査を継続し住居址の検出をすることを確認し、第1次発掘調査を終了した。

第2次発掘調査は、昭和49年4月1日から1ヶ月、土曜、日曜を中心にして、第1次発掘調査の際に検出された住居址の確認を中心として行われた。予想どおり円形のプランをもつ住居址が認められたが、時間がなく、約4分の1の面積を発掘したのみで第3次の調査に引きつぐこととした。発掘された部分から考察すると、約6mの直徑をもつ円形プランの住居址で炉石が抜かれた、径1.2mの炉址が中央やや東寄りにあり、東側の床面は非常に堅くたたかれている。壁下に周溝がめぐり、柱穴が2ヶ検出された。出土した土器、炉址等から考え、加曾利E式にともなう住居址であると予想された。

第3次発掘調査は、上松中学校教諭、神村透氏を調査主任として、木曾西高校地歴部の生徒を中心に昭和49年7月31日から8月3日までの4日間行われた。前回の調査によって

検出された部分は、砂によって仮埋立てしてあったためよく保存されていた。さらに南へ $6\text{ m} \times 6\text{ m}$ 拡張し調査した結果、ほぼ完掘することができた。西側は水田工事の削土により壁面ははっきりとは検出できなかつたが、約 6 m の円形プランをもち、加曾利E式に属する時期の住居址であることを確認した。

日義小、中学校生徒諸君の社会科授業の野外実習、木曾西高校地歴部の発掘実習を兼ねた発掘調査であったために、住居址一軒分の調査としては多くの時間をかけてしまい、そのため日義村教育委員会には特にご迷惑をおかけしてしまった。発掘地区の地主である越取長十氏、神村浅芳氏、調査道具や遺物整理等こころよく場所と時間を与えて下さった日義小中学校、ご協力いただいた日義小中学校生徒諸君、木曾西高校地歴部の諸君等、関係各位からいただいた多大なご配慮に対し、厚くお礼を申しあげる次第である。



第1図 御靈森遺跡所在地（・印）

2. 遺跡の位置及び立地

御靈森遺跡は、長野県木曾郡日義村1,779番地、通称御靈森（字上村）に所在する。日義村の西側を切って流れる木曾川の東西両側に山なみが続き、木曾川に平行して国鉄中央西線、国道19号線、旧中仙道が南北に走っている。木曾川が形成した河成段丘は、木曾郡の中でも日義村地内ではよく発達しており、木曾谷にはめずらしく広い空をつくり出している。木曾川西岸に形成された段丘は、国鉄宮の越駅の対岸に徳音寺部落から百島部落にかけて見られるだけであるが、東河成段丘は、木曾川に沿ってほぼ全村に広がっており、その中を木曾川に注ぐ尻平沢川、正沢川などの支流がつくる大小の扇状地が形成されている。遺跡は、特に広く発達している第2段丘上に尻平沢川が作った扇状地の一一番山よりの尻平沢南側に立地している。（第1図・第2図）この扇状地上に御靈森遺跡の各地点が含まれている。

今回発掘調査した地点は、すぐ北10mで尻平沢が高さ15mの崖となって落ち込んでおり、沢をはさんで上の原遺跡がある。東は約30mで山となり尻平沢が奥深く入っている。西はゆるやかな傾斜が続き、発掘地点から30mで国道19号線に出、さらに日義小中学校、上村部落に続く桑畑、畑が広がっている。

3. 周辺の遺跡

日義村には多くの遺跡が分布しており、現在確認されているだけで66遺跡を数えることができる。時期も各期にわたり、先土器時代から平安、鎌倉までと、その数、内容ともに木曾谷に数の埋蔵文化財の宝庫といえる。これは先に述べたように、発達した河成段丘、いくつもの木曾川へ注ぐ支流の沢、川、そして、正沢川が形成した広い高原状の扇状地木曾駒高原、連なる山なみ、豊富な水が、人々の生活の糧である各種の食糧を豊富に供給してくれたことに原因していると思われる。第3図に見られるように各時期にわたり遺跡が所在していることがわかるが、特に縄文中期の遺跡と、平安時代のものと思われる灰釉陶器片を出す遺跡が圧倒的に多いことがわかる。この時期に適した環境であったのであろうか。また、その他に弥生時代の遺跡が7ヶ所あることも注目される。

木曾谷に弥生式時代の遺跡が確認されているのは、山口村7ヶ所、上松町、木曾福島町

三岳村に各1ヶ所、大桑村に2ヶ所のみである。はっきりと確認されていない遺跡もあり、さらに今後発見される遺跡もあると思われるが、その数は多少増減すると考えられるが、木曾谷中の弥生時代の遺跡の約3分の1を日義村で占めているのである。このことは当時、気候その他の条件から考え、稻作が普及し難かったであろう木曾谷において、特異なことであるといえる。すべての遺跡について述べていきたいが、紙面の関係もあり、次の機会にゆずるとして、ここでは御靈森遺跡の周辺のみ略述することとする。

前述したように、御靈森遺跡は、尻平沢が形成した扇状地上にいくつかの地点で所在している。第2図で見るよう尻平沢川にそって南側に4軒の住居址がならんでいる。①は水道管理設工事の際その敷地より昭和37年6月に、長谷川悦夫氏によって確認されたもので、約80cm四方の石囲い炉と柱穴、貯蔵穴が検出されている。住居址のプランは認められないが、出土土器等から考え、加曾利E期のものと思われる。②は今回発掘した住居址、③と④は同37年秋に水道工事が行われた際、水道管を埋める溝の断面に発見された落ち込みから、当時日義中学校教諭であった神村透氏が注意し、発掘調査された住居址である。③は半分しか調査できなかったようであるが、直徑約4mの円形プランをもち、ローム層を40cm掘りこんであり巾14cm、深さ10cmの周溝がめぐっている。床面は堅くかためられており、床面中央よりやや東側に70cm×80cmの石囲い炉が検出されている。遺物は加曾利E期の土器、打石斧、石鎌、石錐、スクレーパー、磨石斧等が出土している。④の住居址はローム層を30cm掘っていて、約6mの直徑をもつ円形プランの住居址で、周溝をもち、加曾利E期土器片、打石斧が検出されている。⑤の住居址は国道19号線の新設工事により、昭和40年に破壊されてしまったようである。⑥は平安時代の住居址で、昭和37年の水道管理設工事の溝中で発見され、神村透氏により、昭和39年日義小中学校々庭新設工事の際発掘調査されている。隅丸方形プランをもつ住居址が3軒検出され、多数の灰釉陶器、鉄製紡錘車、鉄滓等々が発掘されている。⑦⑧からは灰釉陶器片、繩文中期土器片、打石斧等が多数採集されており、地下には、住居址等の遺構が存在しているものと思われる。⑨は上の原遺跡で、今回発掘した地点より尻平沢をはさんで、ちょうど真向いにあたる。戦後、日義小学校教諭であった丸山通人氏によって発掘されているが、その報告はなされておらず詳細なことは分らないが、住居址が発掘され、勝坂式、加曾利E式土器が多数検出されたようである。遺物は木曾教育会郷土館に保存されている。

以上ごく限られた範囲で見てきたが、尻平沢を軸として、山側の両側に加曾利E期の住居址が数軒並んで1つの集落を作っていたことがわかり、さらに尻平沢の木曾川寄りには時代が下って平安期の集落が営まれていたことが指適できる。時代により集落設置場所に違いがあることを知るひとつの例としてあげることができよう。



第2図 周辺遺跡分布図

時代	先土器	繩文期	前期	中期	後期	晩期	弥生	奈良	鎌倉
遺跡数	5	11	5	44	5	2	7	25	1

- 青沼著、木曾谷の遺跡地名表（木曾教育44号）ならびに日義村埋蔵文化財台帳による
- 各時期にわたり1遺跡から遺物が出土しているところはだぶっている

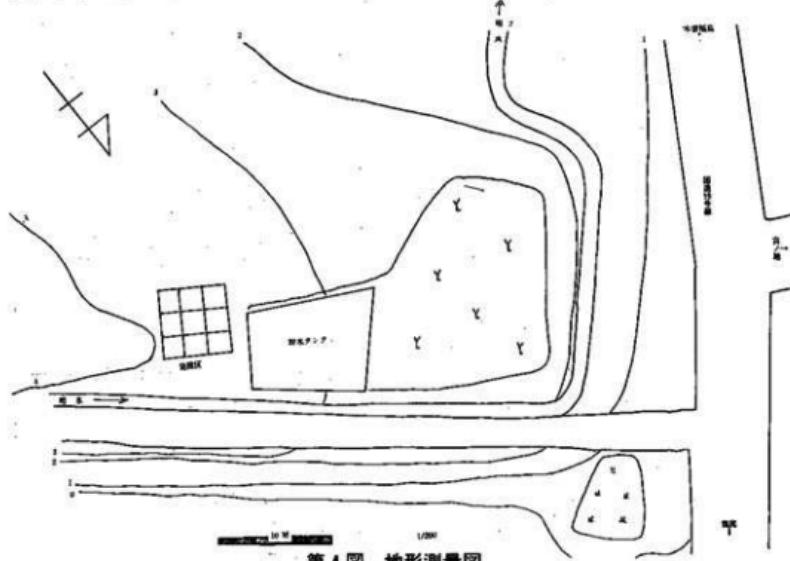
第3図 日義村の時期別遺跡数

4. 遺構

(1) 住居址

発掘区のすぐ東から南にかけて唐松林が広がっており、その唐松の立木のために、東と南西の一部分は発掘することができず、はっきりしたプランをつかむことができなかつたがほぼ完掘することができた。

南北径6.4m、東西径6.2mのはば円形のプランをもち、ローム層中へ東から北にかけて40cm、北から西にかけて35cm掘りこんでいる竪穴住居址である。炉址は中央より東側に片寄ってあり、東側に長さ90cm、巾50cm、厚さ15cmの扁平な炉石が横に立った状態であるのみで、他の三方の炉石は、はずされたと見られる。炉西側に認められる凹地は深さ20cm程度あるが、明らかに炉石をはずす際に掘りこんだ痕として見ることができる。炉の大きさは、残っている炉石から考え1m~1.1mの方形の石囲い炉であったと思われる。炉の深さは床面より50cmあり、かなり焼けた痕が見られる。特に東側はロームが赤褐色にまで変色しており、その焼土の厚さは1~1.5cmあり、特に東側での火勢が強かったことを物語っている。



第4図 地形測量図

そのためであろうか、残されている炉石はバラバラに崩れて散らばっていたが、復元するともとの大きさにすることできた。この炉石は、そのため持ち去られずに残されたものであろう。炉址のすぐ北に1m×80cmの範囲で焼土が認められたが、焼土の厚さは0.5cmと薄かった。

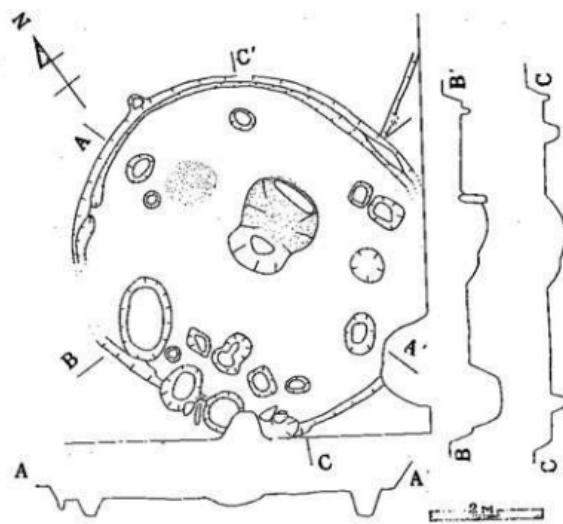
床面は、豊くたたきしめられており、特に南北の線より東半分がよくたたきかためられている。西側の部分はそれに反してやや柔らかであり、特に敲きかためられた痕はなかった。炉址東側の床面を剥いでみると、床は約5cmの厚さで貼られており、その下10cmまで暗褐色の土層があった。そのプランは時間の関係もあり検出できなかつたが、何らかの遺構があり、その上に床を貼ったものと思われる。周溝は北から東にかけた住居址の半分のみめぐっているだけで、南側には認めることができなかつた。深さ15cm～20cm、巾10cm～20cmあり、北西の箇所で一旦とぎれ、またはじまっている。

主柱穴は6ヶと見るが、そのほかに補助柱と思われるピットが主柱穴に隣接して4ヶ認められる。いずれも深さ床面下30cm～35cm掘りこんである。壁面には北に30cm×30cm、深さ25cm、南西の方向に90×60、70×70cm、深さ10×15cmのピットが認められるが、これは樽木をつき出した穴と考えられる。主柱穴の配列と炉址の場所から考え、出入口は西にあつたと考えたい。その出入口のすぐ南に、1m×50cm×95cm、深さ55cmの貯蔵穴と思われる大きなピットがある。埋ガメなどの地下埋蔵物は発見できなかつた。

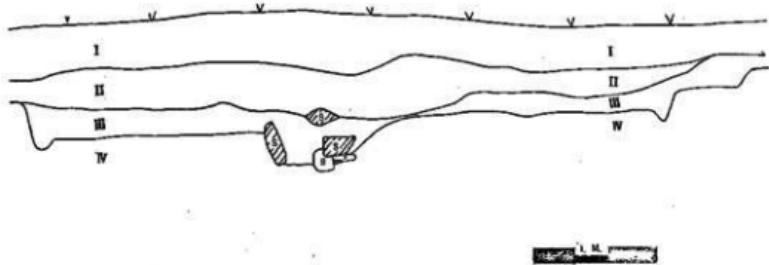
(2) 住居址北のピットと焼土

第1次発掘調査の際認められたもので、2ヶのピットと3ヶ所に焼土を検出した。焼土は住居址北壁20cmの所にあり、浅い落ち込みがあり、周間に50cm×50cmの焼土が3ヶ所にあり、余り強くは焼けていない。住居址よりに小礫が10数ヶたまつてあつたが、中には焼けているものもある。

ピットは、発掘区西に1m×80cm深さ40cmの比較的大きなピットと、東に50cmの径をもつほぼ円形で深さ40cmのピットがあつた。また、東側には18cmの段差があり、はっきりと確認できないがこれ等のピット焼土等は、住居址に附属するものと考えられる。この地区からは、勝坂期の土器が多く認められたので、勝坂期の住居址を、加曾利E期の住居が切っていると考えることができる。



第5図 住居址実測図



- I : 表土
- II : 混疊黒色土層
- III : 混砂疊黑褐土層
- IV : ローム層

第6図 住居址覆土地層図

5. 遺物

(1) 石器

石器の量は少なく、種類も少ない。出土した石器は石鎌6、打石斧5、敲石4、磨石斧1、砥石状のもの1のみである。

石鎌

1、2は黒曜石製、3、4、5はチャート製、6は頁岩製である。1は基部がとがっておらず7mmの巾をもつ脚はそのままの巾で、中ほどの稜線は外反しており、鋸歯状の刃がつけられている。先端を欠く。おそらく押型文土器に附属する時期のものと思われる。基部巾2.5cm、長さ2.2cmを測る。厚さは3mmと非常に薄い。2の石鎌は両脚を欠いている。3、4、6は基部はわたりで両脚はやや内側に湾曲しており、類似した形態をもつ。4、6はていねいな調整をしているが、3は刃部のみ調整してあり、中備まで調整痕はおよんでいない。5は三角形をしてややふ厚い。計測値は、3が長さ2.7cm基部巾1.3cm厚さ5mm、4は長さ1.7cm復元すると2.3cm基部巾1.4cm厚さ3.5mm、5は長さ2.1cm巾1.6cm厚さ5mm、6は長さ2.3cm巾1.6cm厚さ4mmであり形も美くしい。

打石斧(第7図 7~11)

数は少なく、いずれも覆土中から出土したものであり調整は雑である。石質は硬砂岩製であるが、11は玄武岩のようである。7は巾10cm厚さ2.1cmと大きく、非常に雑に作られている。8、9は長さ13cm巾6cmとほぼ同じ大きさで、厚さは1.8cm、1.3cmである。作りは雑である。10はやや小型になり刃部を欠いている。巾3.6cm厚さ8mm裏側は自然面を残している。11は打石斧というより横刃型の石器であろう。断面は楔型であり、その先端を加工し刃をつけている。裏面にはやはり自然面を残す。しかし、図左側の部分もていねいに刃をつけてあり、必ずしも横刃型石器とはいはず石質、形態から見て注意される石器である。

磨石斧(第7図 12)

刃部を欠く定角式磨石斧である。脇部がやや厚く、左右と頭部にかけて斜めに磨いてあり、蛇紋岩製である。

敲石(第7図 13~16)

4ヶ出土した。13は断面三角形を呈し、縄文早期に見られるものと同じ形態である。押型文土器に附属する石器と考えることができる。14は敲石よりも磨石といった感じで打

痕は認められず、表面はなめらかである。約3分の1を欠く。15は先端部に打痕が認められる。表面は赤褐色に変色しており、火にあつたのではないかと考えられる。16は上下先端に打痕が認められる。

砥石状石器（第7図 17）

厚さ4.5cmで周辺にいくに従い薄くなる。表面はなめらかであり、物をこすり合せたと考えられる。石皿のような役目も果したであろうか。欠損品である。

他に、加工は認められないが長さ30cm巾5cmの角柱状の石が出土しており、覆土中よりこれらの石は発見されていないので、何らかの使用目的をもち、持ちこまれたものと考えられる。

（2）土 器

縄文早期土器

① 押型文土器（第9図）

1は格子目押型文土器で外反した口縁部の破片である。口唇にいくにしたがい薄くなり丸みをもつ。格子は 2×2 mmで形が整っており、原体の軸の長さは2.5cmであり、たてに回転施文されている。黒褐色を呈し胎土中に雲母の小片を含んでいる。

2は山形押型文の脇部破片である。大きな山形で、原体の陰刻が細かいのが特徴である。上から下へたてに回転施文してある。胎土には非常に細かな石英粒、雲母片が認められ、比較的厚手（7~8mm）で、焼きはそれほど堅くない。山形文の特色からみて、立野式土器と考えられる。

② 含繊維縄文土器

3の土器で胎土に纖維を多く含む。焼きがもろいため剥落している部分もあるが、表面に浅い条痕が認められる。早期末の所産と思われる。

縄文前期土器

① 縄文土器（第9図）

・粗粒斜縄文土器（4、5、6）——縄文粒が大きいところが特徴であり木曾谷の前期縄文土器に見られる特徴である。胎土には石英粒を含み、焼成はやや堅い。

・粘土紐貼付斜縄文土器（同7）——斜縄文を地紋とし、その上に巾5mmの粘土紐を横走させ、上にはさらに連続弧状に貼付し、下には半月状に粘土紐を貼布している。

・竹管文土器（同8）——平行沈線文と、連続爪型文の組み合わせた脇部破片である。諸

磯B式土器と考えられる。9は巾のせまい平行沈線文を施文してある胸部破片で、くの字状とたてに平行な沈線が見られる。前期後半の諸磯C式にあたる土器と思われる。

縄文中期土器

(1) 中期前半の土器 (第9図~10図)

10~16の土器は同一個体と考えられる。10は内湾する口縁部の破片で口縁に添って帯状の無文体をおき、その下部は櫛状器具による細かなたての条線で埋められている。11、12でみると粘土紐で条線文部を区画し、間に縄文をつける部分がある。13~16は胸部破片で縄文がたてになるよう施文されている。17も外反する口縁部の土器片で、口唇部には細かな条線をついている。さらに貝殻状の器具と思われるもので押捺されており、その下部は口縁部に横走する隆帶をめぐらし、たてに間隔をもたせ隆帶をはりつけ、隆帶の間を細かな条線で埋め、破片右部分に見られるように、縄文が地文となり条線を施文してあると見られる。以上の土器は胎土、文様からみて木曾谷の土器ではなく、岐阜県から西日本につながる土器と考えられる。18は山形状口縁の破片で、粘土紐と押引き沈線文により文様が構成されている。19はわずかに内反する口縁部で、口縁に平行に走る横帶の下部をやや粗く櫛状工具でたてに走る平行沈線で埋め、押捺のある突帶で区切っている。20も内湾する口縁部破片でたてにカーブする隆帶をおろしている。21は胸部破片で押捺のある隆帶を横に走らす。18~21は厚みは比較的薄く、この地方に多く見られる土器で、飯田地方の土器とのつながりをもっている。22~24は巾の広い半載竹管で、浅く沈線をつけた胸部破片で、いわゆる平出III類Aの土器である。

25~36と第10図1~20までは、勝坂式土器の一群である。25は口縁部に大きな装飾的手をもつ深鉢である。26は口縁部破片で半月状に区画する隆帶をはりつけ、その中は太い沈線で埋める。隆帶には刻目がつけられ半月と半月の間の部分は三叉文が施されている。27、28はいわゆるキャタピラ状文様のある土器で、波状の沈線と組み合わされている。30~32は同一個体の土器で、湾曲する隆帶をめぐらし隆帶に刻目が入る。33は隆帶の横を連続押引き沈線文で埋めている。34は隆帶で梢円状に区画し、隆帶には刻み目を施す。中はヘラ描き沈線で埋めてある。35は同じく隆帶により区画し押引き沈線で埋めてある。36は口縁部破片で、粘土紐で弧状に区画し、その中は交互にヘラで太い刻み目を入れてある。隆帶は綾形状に細かなヘラ描き文を入れてある。

第10図1、2は同一個体で、刻み目のある隆帶の中をたてや斜めに走る押引き列点文により構成している。3は口縁部の破片で、隆帶で区画された中を沈線で埋め、隆帶は交互

におしこまれている。4は綾形状の刻み目のある隆帯で区画され、その間は三叉文によつて埋められている。5、6も同様の手法が見られる。8は大きく外反する無文帯の口唇部をもつ。頭部には櫛形工具による沈線文がつけられている。9~13も同様である。14は繩文を地文にし、たてに刻み目のある隆帯を下ろしている。15は粗い繩文を地文とした胴部破片で、刻み目のある階円と円を組み合わせ、中はヘラ描き沈線で埋めてある。16は胴下部の破片で、くの字状になり底部へ続く部分である。地文の繩文を横ナデにより削りとっている。17はくの字状に折れる口縁部破片で無文である。18は有孔鉗付土器の口縁部破片であり、左下にあけられた穴の部分が残っている。焼きは堅く、表面はなめらかに磨かれている。19、20は同一個体で、浅鉢の口縁部とそれに続く文様帶の部分である。井戸尻期平行の土器と思われる。

(2) 中期中頃の土器 (第10図 21~27)

21、22は同一個体の口縁部で、波状をなす連続押引沈線の爪形文を走らせ、隆帯で区画された中をたてに走る細い沈線で埋め、周辺を押引きによる太い沈線で区切っている。23、24は内湾する口縁部の破片で、粘土紐を貼付し文様を構成している。25~27はたてと横に走る平行沈線を組み合わせた文様をもつ土器で、これらは勝坂期から加曾利期へ移行する時期の土器と思われる。

(3) 中期後半の土器 (第11図~第12図)

第11図1、2と第8図は同一土器で、カメ型土器の大きな口縁部の破片である。口縁部より突出した把手をもち、把手はヘラ描き沈線による渦巻文が二つ施されている。把手のすぐ下には突出した装飾がつけられ、その周囲はヘラ描き沈線と隆帯により区画され、横へは交互に押捺されてできた波状文帯が3本走り、カップの把手状の装飾が大きくついている。把手には3本の太い沈線が走る。3~5は同一土器の胴部破片と考えられ、沈線にはさまれた隆帯を孤状につけ、その左右を八の字状にヘラ描き沈線で埋めている。加曾利E期に見られる文様の構成である。6、7、8も同様の施文により構成されている。9、10は文様構成土器の厚さから、岐阜県に見られる同時期の土器である。11~14は斜繩文を地文にして沈線を施した文様構成をもつ、尚14は浅鉢型土器と思われる。第12図1、2は同一個体で、口縁部は内側に折れ、口縁にそって深い2本の沈線がめぐらされ、そこから頭部にかけて沈線を孤状に埋める。頭部には波状に粘土紐を2带めぐらし区切る。胸部は浅い条線を地文にして粘土紐を貼布し、渦巻文と、たてに下がる波状文で

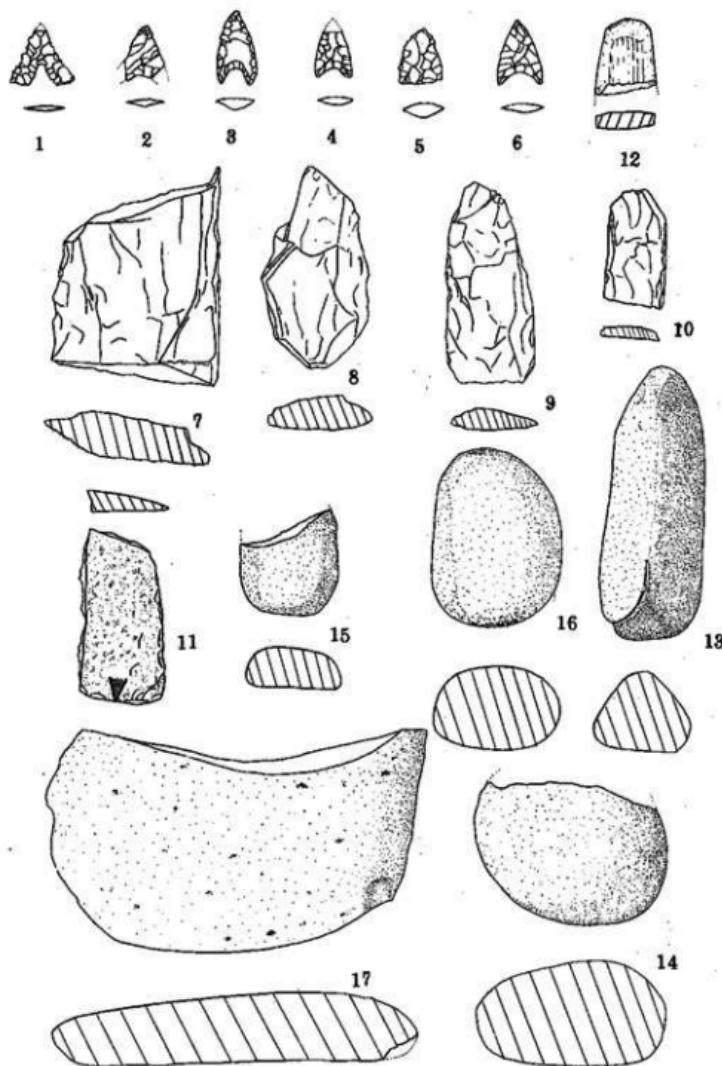
構成される。3、4も同じ個体の口縁部破片で、やや内側へ折れこむ口唇をもつ。口縁に接し上下に沈線で区画し、中には斜めに走る条線を施している。頸部には交互刺突により波状文を作り出している。5は口縁部の破片で、隆帯で区画された中を粘土紐が波状に貼付されている。その下には刺突列点文を施してある。7は口縁部破片で、ふ厚い口唇に三条の連続押引き沈線の爪型文を施している。口縁上部にも口唇部と同じ文様を横に走らせ、同様の手法によりその下に渦巻文を施文している。他の部分はたてに走る条痕で埋められている。8は筒状土器の口縁部で、口唇は内側に折り曲げ厚くして、その上面を沈線がめぐらしている。隆帯で区画された口縁部は、口縁にそって横走する連続押引き沈線をめぐらし、その下部はたてに押引き沈線によって埋めている。沈線によって区画された胴部は、浅く細かな条線による地文の上にヘラ描き沈線でたてに走る波状文と、尖がるの字状沈線を施している。9～13も胴部破片で、条痕を地文としその上にたてに走る隆帯や太い沈線の文様をつける。12、13は同一個体の土器で、住居址床面より発掘された。直線、波状の太い沈線がたてに走っている。14は底部破片で、粗いあじろの痕が残る。あじろの痕は方向を異にしているが、土器製作時に二回置きなおしたことがうかがえる。

6. 結語

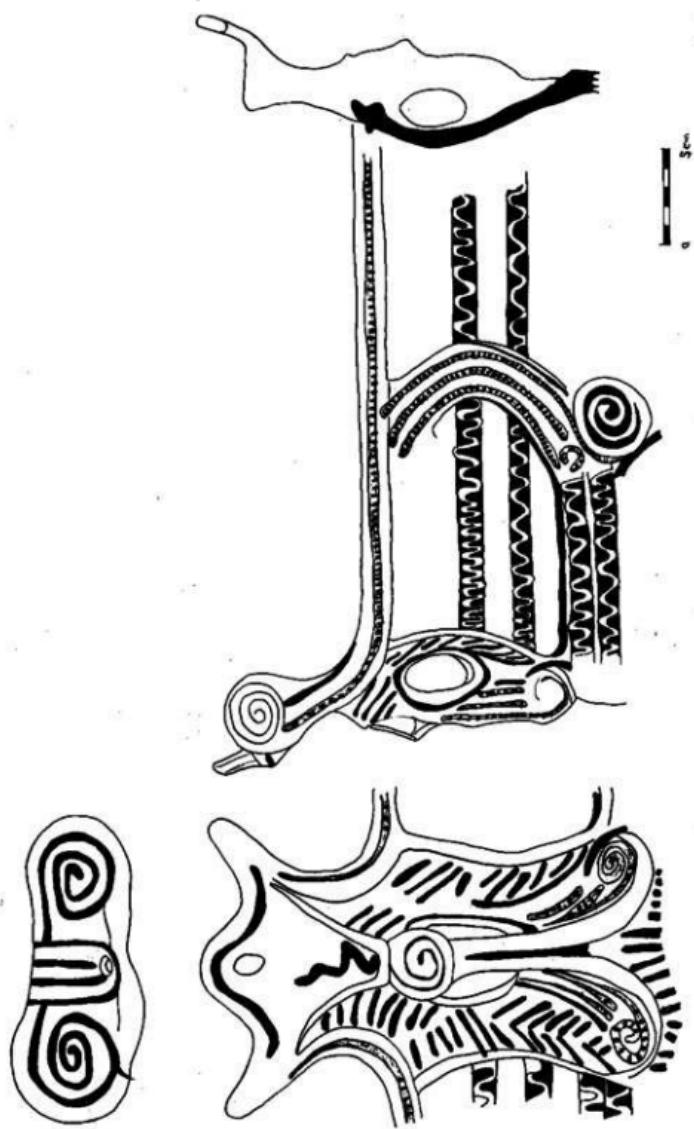
以上述べてきたように、本住居址は、加曾利E II期に属するものと考えられる。第6図の住居址覆土地層図でみるとおり、覆土中には比較的小さな礫が多量に混入しており、水を含む土砂が流入してきたと見られる。すなわち、住居址が廃棄された後、尻平沢の比較的おだやかな氾濫か、大雨により、山肌の土砂が流れ出したかのいずれかにより住居址が埋没し、さらにもう一回そのような氾濫のため、さらに埋没が進んだと考えられる。

3、周辺の遺跡で述べたように、尻平沢を中心として4～5軒の単位で集落が営まれていたうちの1軒と考えられる。さらにこの地区には、加曾利E II期の集落が営まれる以前は、勝坂期の住居があったと思われ、尻平沢の対岸上にある上の原遺跡からも、そのことがわかるのである。

終わりに、学校の仕事等に追われて執筆が遅れ、日義村教育委員会はじめ関係の方々に多大なご迷惑をおかけしてしまったことをお詫びし、あわせて、関係各位から寄せられたご助力、ご指導に対し厚くお礼申し上げる次第である。

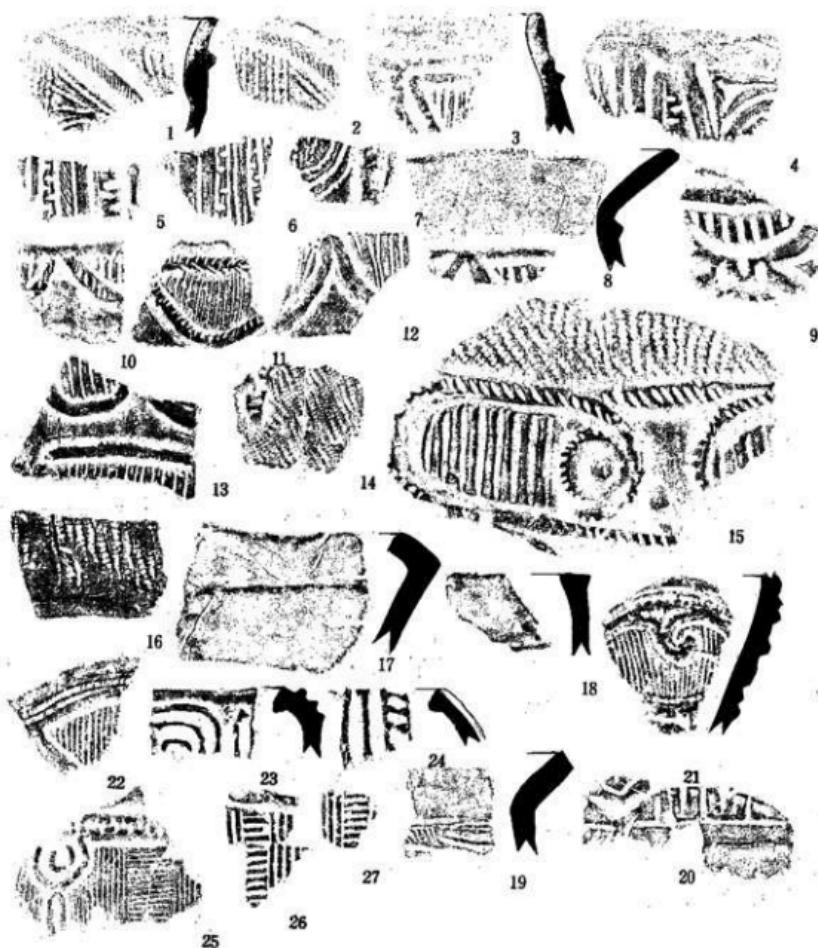


第7図 出土石器実測図





第8図 出土土器拓影



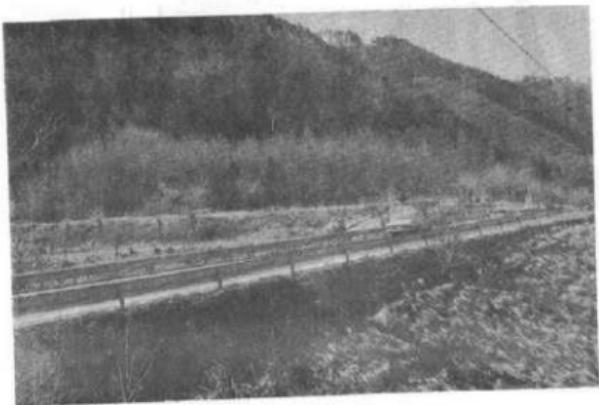
第10図 出土土器拓影



第11図 出土土器拓影



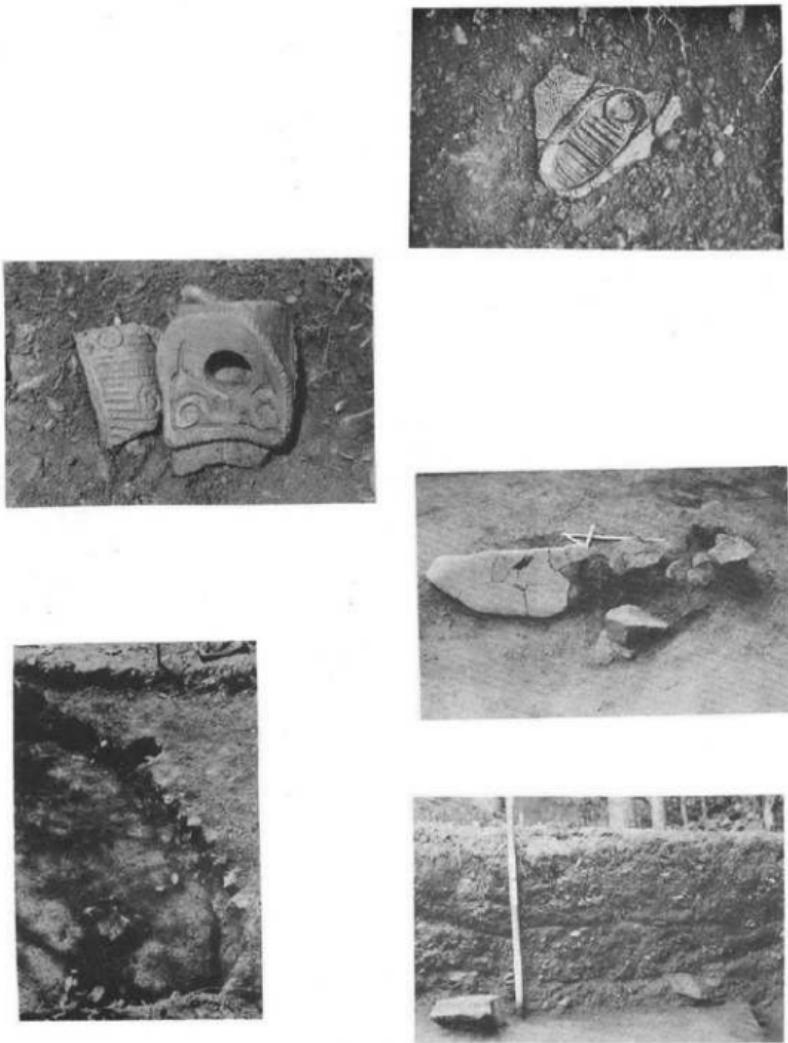
第12図 出土土器拓影



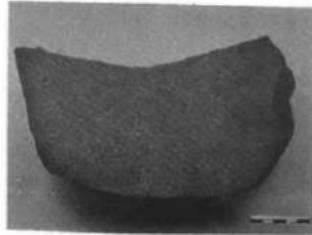
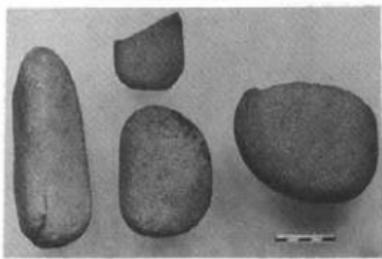
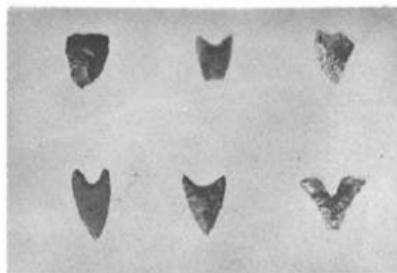
図版1 遺跡遠景



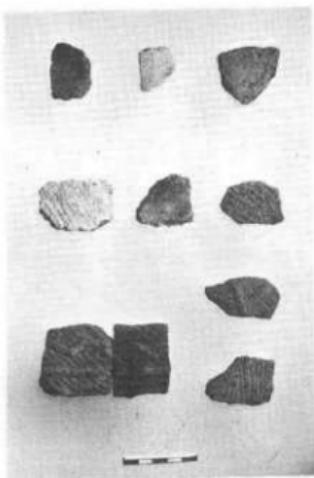
圖版 2 住居址



圖版 3 出土遺物、遺構



图版4 出土石器



縄文早前期の土器



縄文中期前半の土器



縄文中期前半の土器



縄文中期中頃の土器

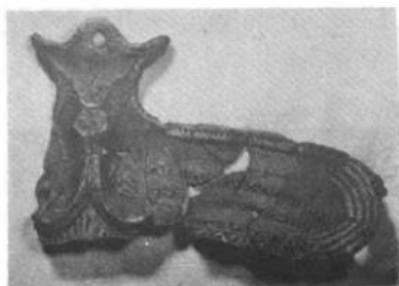
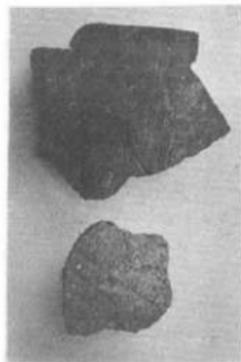
第5図 出土土器



縄文中期中頃の土器



縄文中期後半の土器



縄文中期後半の土器

図版6 出土土器



第2次～第3次調査



第一次調査



図版7 発掘調査風景

非売品

発行 昭和51年3月31日

編集 長野県木曽郡日義村
日義村教育委員会

印刷 安藤印刷 ☎02642-2-2353

